

# 『源氏物語』のドイツ語訳における前置詞 seit と 完了形の共起について

—アーサー・ウェイリー訳とハーリチカ訳の比較を通して—

杉田芳樹

## 1

本論考のテーマは、『源氏物語』の英訳と独訳の比較を通じて、ドイツ語における「継続状態」の表現の特徴を明らかにすることである。これまでに刊行された源氏物語のドイツ語訳は主に4点ある。つまり、Maximilian Müller-Jabusch (1889-1961), Herberth Egon Herlitschka (1893-1970), Walter Donat (1898-1970), Oscar Benl (1914-1986) の各氏によるものである。Müller-Jabusch 訳 (1911)<sup>1)</sup> は、『源氏物語』の最初の外国語への翻訳書である末松謙澄 (1855-1920) の英訳 (1882) を基にしており、内容は第一から十七巻まで、そして、Donat 訳 (1947)<sup>2)</sup> は、『源氏物語』原典からの初めてのドイツ語訳で、「若紫」の巻のみである。

Herlitschka 訳 (1937)<sup>3)</sup> は、名訳として知られる Arthur Waley による英訳 (1925-33)<sup>4)</sup> からの重訳 (したがって、その内容は、Waley が訳出した第一から四十巻まで (「鈴虫」の巻は欠)) である。小論では、上記の二書よりも文体的に、あるいは内容的に充実している Herlitschka 訳を研究対象にし、Waley 訳と Herlitschka 訳を比較することで、ドイツ語の前置詞 seit を含む「継続状態」を表す文の特徴、特に時制に関する特徴を明確にした。さらに、その際に、『源氏物語』全巻を原典からドイツ語に翻訳した Benl 訳 (1966)<sup>5)</sup> を参照して、重訳である Herlitschka 訳を見直す。<sup>6)</sup> なお、考察対象は「桐壺」と「空蟬」の巻に限定した。まず、ドイツ語の前置詞 seit に相当する前置詞 since を含む文を Waley 訳から引用する。

## 2

Waley 訳の「桐壺」の巻には、前置詞 since が使用されている文が2箇所

所ある。以下、Waley 訳とその邦訳、そして、その箇所と内容的に符合する Herlitschka 訳と Benl 訳を記す。また、参考までに、『源氏物語』の原典と現代語訳も付記する。下線はいずれも筆者（杉田）による。

1.1.1. Waley (1925)<sup>7)</sup> : The old lady had for long been a widow and the whole charge of keeping the domain in repair had fallen upon her daughter. But since her death the mother, sunk in age and despair, had done nothing to the place, and everywhere the weeds grew high (p.11)

1.1.2. 佐復 (2008)<sup>8)</sup> : ここの老女はずっと前に夫を亡くして、屋敷の補修はすべて娘が世話を引き受けていた。しかし娘が死んでから、母親は老齡と絶望とに沈み込み、屋敷をほったらかしておいたので、どこもかしこも雑草が丈高く生い茂っていた。(p.24)

1.2. Herlitschka (1954) : Die alte Dame war schon lange Witwe, und die ganze Last der Verwaltung des Anwesens war ihrer Tochter zugefallen. Seit deren Tod aber hatte die Mutter, von Alter und Verzweiflung überwältigt, nichts für den Besitz getan, und überall wuchs hohes Unkraut. (p.13)

1.1.1 では、完了形（過去完了形）と since が共起し、そして、1.2. でも完了形（過去完了形）と seit が共起している。「継続状態」を表す時制は、一般的に、英語では完了形（現在完了形）、ドイツ語では非一完了形（現在形）であるので、1.2. は例外的なケースにみえる。ここで注目したいのは、否定を表す不定代名詞 nichts が使用されていることである。このことに関しては後述する。

1.3. Benl (1966) : Die Mutter der Verstorbenen hatte, obgleich sie das Leben einer Witwe führte, dieses Anwesen bisher liebevoll gepflegt, um ihre Tochter sorgsam aufzuziehen, und in guten, keineswegs beschämenden Verhältnissen gelebt. Nun aber war sie ganz in Trauer um ihr totes Kind versunken und weinte immerzu. Das Gras im Garten war ungepflegt hochaufgeschossen (p.12)

1.4.1. 原典<sup>9)</sup> : やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひ立てて、めやすき程にて過したまひつる、闇にくれて臥し沈みたまへるほどに、草も高く成 (p.11)

1.4.2. 谷崎 (1979)<sup>10)</sup> : この家のあるじの母北の方は、やもめぐらしをしていますけれども、御息所一人を守り立てて行くためにここかしこ

へ手入れをして、どうやら見苦しくない程度に過ごしておられましたが、子故の闇にかきくれて泣き沈んでいましたうちに、いつしか草が高く伸びて (p.28-29)

1.3. には seit は使用されておらず、1.2. の中の副詞句の箇所 (von Alter und Verzweiflung überwältigt) が表現されているにすぎない。しかし、1.4.1. をみると、1.2. は原典の意味内容を補足したものになっており、1.3. の方が原典に忠実に訳出していることがわかる。

2.1.1. Waley (1925) : A certain Dame of the Household, who had served the former Emperor, was intimately acquainted with the young Princess, having known her since childhood and still having occasion to observe her from without. (p.16)

2.1.2. 佐復 (2008) : 先の天皇に仕えていたある内侍がこの皇女の親しい知り合いで、子供のころから知っていて、今でも外からこの娘を見る機会があった。(p.36)

2.2. Herlitschka (1954) : Eine der Hofdamen, welche schon dem früheren Kaiser gedient hatte, stand mit der jungen Prinzessin auf vertrautem Fuß, da sie sie von Kindheit an kannte, und hatte noch immer Gelegenheit, sie zu beobachten. (p.23)

2.1.1. では、完了形と since が共起し、そして、2.2. では非一完了形 (過去形) と von Kindheit an で表現されている。seit は用いられていないが (seit der Kindheit ではない) が、しかし、「継続状態」の表現として非一完了形が使用されているのは一般的だといえるだろう。

2.3. Benl (1966) : Die Naishi no Suke, die schon bei dem vorigen Herrscher gedient hatte und nun auch ihm aufwartete, pflegte im Hause der Mutter jener Prinzessin ein und aus zu gehen, sie kannte sie daher von frühester Jugend auf, sah sie auch jetzt noch manchmal und berichtete dem Kaiser folgendes über sie: (p.23)

2.4.1. 原典 : 上にさぶらう内侍の典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しうまいり馴れたりければ、いはけなくをほしましし時より見たてまつり、いまもほの見たてまつりて (p.21)

2.4.2. 谷崎 (1979) 訳 : 帝にお付き申している内侍は、先帝の時から御奉公をしていた人で、かの母後の御殿にも親しくお出入りをし慣れて

いますので、まだお小さい時分からお顔を存じ上げ、今も仄かにお目にかかることがありまして (p.42)

2.3. では、「継続状態」が非-完了形（過去形）と von frühester Jugend auf で表現されている。seit は用いられていない (seit frühester Jugend ではない) が、しかし、「継続状態」の表現として非-完了形が使用されているのは一般的文体だといえるだろう。「継続状態」を表す時制は、一般的に、英語では現在完了形、ドイツ語では現在形（非-完了形）であることは上述したが、「桐壺」の巻よりも会話表現が多く記述されている「空蟬」の巻にはその典型的な例がみられる。以下の2箇所である。

3.1.1. Waley (1925) : “My lady of the West” has been here since this morning, and she is playing go with my other lady.’ (p.48)

3.1.2. 佐復 (2008) : 「西の方さまが今朝からいらっしゃっていて、もう一人のお方さまと碁を打っているのです」。(p.107)

3.2. Herlitschka (1954) : “Die Herrin des Westens ist seit dem Morgen hier, und sie spielt Go mit unserer Herrin.” (p.73-74)

3.1.1. では現在完了形と since が共起し、また 3.2. では現在形（非-完了形）と seit が共起している。

3.3. Benl (1966) : «Es ist heute», erklärte man ihm daraufhin, «die Dame des Westflügels hier erschienen. Sie spielt mit der Herrin Go.» (p.78)

3.4.1. 原典 : 「昼<sup>ひる</sup>より、西<sup>にし</sup>の御方<sup>かた</sup>の渡<sup>わた</sup>らせ給<sup>たまひ</sup>て、碁<sup>ごう</sup>打<sup>う</sup>たせたまふ」(p.85)

3.4.2. 谷崎 (1979) : 「昼間から西の方がお越しになって、碁を打っていらっしゃるのです」(p.117)

3.3. では、当該箇所は現在完了形で表されているが、3.4.1. の「昼より」の訳語が heute になっており、さらに本動詞は Perfektiv である erscheinen が使用されているために、継続状態の表現にはなっていない。

4.1.1. Waley (1925) : “I have been terribly bad with the colic since yesterday and was lying up, but they were shorthanded last night, and I had to go and help, though I did feel very queer all the while.” (p.52)

4.1.2. 佐復 (2008) : 「私は昨日から差し込みがひどくて、寝ていたのですが、ゆうべは人手が足りなくて私も手伝いに行かねばならなかったのですよ、そのあいだじゅうとても気分が悪かったのですけ

れどね」。(p.116)

4.2. Herlitschka (1954) : »Ich leide seit gestern ganz schrecklich an der Kolik und lag zu Bett: Aber gestern abend war nicht genug Bedienung da, und ich mußte aufstehn und helfen, obgleich ich mich die ganze Zeit sehr übel fühlte.« (p.80)

4.1.1. では現在完了形と since が共起し、そして 4.2. では現在形(非一完了形)と seit が共起している。

4.3. Benl (1966) : «Wachtet Ihr heute nacht bei der Herrin? Ich habe seit vorgestern scheußliche Schmerzen im Leib und habe mich ganz nach unten in den Dienerinnenraum zurückgezogen. Dann aber hieß es, es seien zu wenig Leute zur Bedienung da, und so kam ich wieder nach oben. Meine Schmerzen sind noch immer unerträglich ...» (p.85)

4.4.1. 原典：「おもとはこよひは上<sup>うへ</sup>にやさぶらひ給つる。おとゝひより腹<sup>(たまひ)</sup>を病<sup>や</sup>みて、いとわりなければ下<sup>しも</sup>に侍<sup>(はべり)</sup>つるを、人少<sup>ずく</sup>なりとて召<sup>め</sup>ししかば、よべ参<sup>ま</sup>う上<sup>のぼ</sup>りしかど、なほえ耐<sup>た</sup>ふまじくなむ」(p.92)

4.4.2. 谷崎 (1979) : 「あなたも今夜はお上<sup>うへ</sup>でしたの。私は一昨日からお腹が痛<sup>いた</sup>んでなりませんので、下<sup>した</sup>っていたのですけれど、人少<sup>ずく</sup>なだからとおっしやって、お召<sup>め</sup>しになりますので、昨夜上<sup>あ</sup>がったのですが、やっぱり痛<sup>いた</sup>くって痛<sup>いた</sup>くって」(p.128)

4.3. でも、現在形(非一完了形)と seit が共起している。なお、Benl 訳では、4.4.1. の「おとゝひより」の Herlitschka 訳 (Waley 訳) の間違い、つまり gestern (yesterday) が vorgestern と修正されている。

「桐壺」の巻の Herlitschka 訳には、前置詞 seit と完了形が共起する例がもう一つある。この箇所は、Waley 訳では前置詞 since は使用されていないが、上記と同様に引用する。

5.1.1. Waley (1925) : The rustling of the wind, the chirping of an insect would cast him into the deepest melancholy; and now Kokiden, who for a long while had not been admitted to his chamber, must needs sit in the moonlight making music far on into the night! (p.14)

5.1.2. 佐復 (2008) : 風のさやぎ、虫の声が彼を深い憂鬱に投げ込んだ。それなのにいま弘徽殿は、長いこと天皇の寢室に入れられてはいな

かったが、月の光のなかに腰をおろし、夜遅くまで音楽を演奏しようというのだ！ (p.31)

5.2. Herlitschka (1954) : Das Flüstern des Windes, das Zirpen einer Grille konnte ihn in die tiefste Schwermut versetzen; und nun mußte auch noch Kōkiden, die seit langem nicht mehr in sein Gemach eingelassen worden war, im Mondlicht dasitzen und bis tief in die Nacht hinein musizieren! (p.19)

5.2. は、完了形(過去完了形)と seit が共起している例であり、さらに、1.2. でみられたように否定詞が用いられている。

5.3. Benl (1966) : Bei dem Rauschen des Windes und dem Gezirpe der Grillen fühlte er sich an diesem Tage wehmütiger als sonst, doch die Nyōgo Kokiden, die er schon lange nicht mehr zu sich gerufen hatte, musizierte, da wundervoller Mondschein war, bis tief in die Nacht. (p.19)

5.4.1. 原典：風<sup>かぜ</sup>の音、虫<sup>むし</sup>の音につけて、物のみかなしうおほさるゝに、弘徽殿には久しく上<sup>うへ</sup>の御局<sup>つぼね</sup>にも参<sup>ま</sup>うのほりたまはず、月のおもしろきに、夜<sup>よ</sup>ふくるまで遊<sup>あそ</sup>びをぞしたまふなる。(p.17)

5.4.2. 谷崎 (1979) : 風のおと、虫の音につけても、眼に触れるものが一途に悲しく思えますのに、弘徽殿では久しく上のお局にも伺候ならず、月の面白い夜のことなので、更けるまで管絃の遊<sup>あそ</sup>びに興じておられるのでした。(p.36)

5.3. では、5.2. と同様に、完了形(過去完了形)で、否定詞が用いられているが、しかし、seit は使われていない。

以上のように、1.2. と 5.2. は、完了形と seit が共起しているという点で、一般的なドイツ語文法の理解から逸脱した「継続状態」の表現にみえる。

### 3

ところで、19 世紀初頭に刊行された独辞典、Adelung (第 2 版: 1811)<sup>11)</sup> には、seit の語源に関して興味深い記述がある。その一部を以下に引用する。

Eigentlich dem Orte nach, niedrig, unten, das untere, welches wenigstens eine der ersten und eigentlichsten Bedeutungen ist, wo es sowohl als ein Nebenwort, als auch ein Beywort üblich war. Im Hochdeutschen ist es völlig veraltet, allein

im Nieders. Schwedischen und Dänischen ist es noch völlig im Gange. Nieders. sied, ein sieder Stuhl, ein niedriger, das Wasser ist sieder geworden, (中略) Es ist hier gewisser Maßen das Stammwort von den Intensivis sitzen und setzen, und in Ansehung des Oberd. sint, von sinken, senken; wenigstens ist es mit ihren Stämmen sehr nahe verwandt.

(訳：本来、空間的用法では、「(位置が)低い」「下の方に」の意味であり、少なくとも、「下の」という意味が最初の本来的な意味の一つである。かつては、一般的に、副詞であり、形容詞だった。高地ドイツ語では古語になり、低地ザクセン語でのみ使用されている。スウェーデンやデンマークでは現在も使用されている。低地ザクセン語では sied である。ein sieder Stuhl は ein niedriger の意「低い椅子」。Das Wasser ist sieder geworden。「水位が下がった」。(中略) この語は、ある程度において、強意動詞 sitzen や setzen の幹語であり、そして、上部ドイツの sint は sinken や senken の幹語だといえる。少なくとも、seit はそれらの語の語幹と非常に近い関係にある。)

このように空間的用法の説明から推測すると、seit が時間的用法で使用された場合、過去が下方に位置するので、時間の流れは下から上へ向かうことになるだろう。時間における上下の関係は、例えば、キリスト教の彼岸と此岸の世界がすぐに想起されるが、しかし、キリスト教の場合、現在と過去の世界にそのような上下関係の価値評価を当てはめることはできないだろう。Adelung の見方では、さながら地層が重なり、自然の地形が形成されていくように、過去の世界が積み重なり、現在の世界が生成されていく。Adelung の説からは、そのような sachlich な時間意識が読み取れるのである。19 世紀の独独辞典の中で、Campe (1810)<sup>12)</sup> と Heinsius (1822/1840)<sup>13)</sup> には、やはり Adelung と同様に空間的用法に関する記述がある。ただし、他の同時期の独独辞典 (Wenig (1835)<sup>14)</sup>, Heyse (1849)<sup>15)</sup>, Grimm (1854-1961)<sup>16)</sup>, Sanders (1876)<sup>17)</sup>, Wenig (第 7 版: 1885)<sup>18)</sup>, Heyne (1895)<sup>19)</sup> や 20 世紀以降の語源辞典 (Trübner (1955)<sup>20)</sup>, Kluge (第 21 版: 1975)<sup>21)</sup>, Paul (第 10 版: 2002)<sup>22)</sup> には、seit の空間的用法は記述されていない。それらの辞書は、一様に、seit の本来の意味は時間的用法で „später [als etwas]“ であるという。したがって、seit の語源に関わる空間的用法については、典拠が明確ではなく、根拠に乏しいように見えるが、しかし、空間的用法から時

間的用法への意味的展開はドイツ語の前置詞一般にいえることなので、前置詞 *seit* もそのような経緯を辿った語である可能性はあるように思われる。この点に関しては別の機会に考察したい。

Adelung には、*seit* の時間的用法に関して、前置詞 *seit* と完了形の共起の例が引用されている。特に、ルター聖書からの引用が多数みられるが、しかし、拙論で採り上げる引用文は、日常会話表現だけにとどめたい。なぜなら、ルター聖書は、古典語から少なからず影響を受けているにちがひなく、また、そこには教条的なレトリックが多分に含まれているにちがひないからである。以下、Adelung からの引用である。

Ich habe ihn seit Einem Jahre nicht gesehen. (Einem : 原文ママ)

(訳：私は一年前から彼に会っていない。)

Seit welcher Zeit hat er nicht geschrieben?

(訳：彼はいつ頃から書いていないのですか。)

この二つの文の共通要素は、否定詞 *nicht* である。否定詞の添加によって、「非＝完了状態」、つまり「実現されていない状態」の継続が示されている。これらの文は完了形でのみ成立するように思われる。

\*Ich sehe ihn seit einem Jahr nicht.

\*Seit welcher Zeit schreibt er nicht?

「非＝完了状態」の継続に関する用例は、例えば、『独和大辞典』（第2版：1997）の *seit* の項目にもみられる。

Seit mehreren Jahren habe ich ihn nicht mehr gesehen.

『独和大辞典』には、さらに、„Er ist seit 4 Wochen verweist.“ という文（完了形と前置詞 *seit* の共起の例）が記述されているが、それに関しては、すでに考察したので、拙論を参照されたい。<sup>23)</sup> 前置詞 *seit* を含む文で、そこに否定詞を伴うケースでは、上記の 1.2. 及び 5.2 のように、完了形の形態が一般的であるように思われる。それでは、肯定文では、なぜ「非—完了形」が用いられるのだろうか。それは、文の形態から判断すると、おそらく、「実現した過去の時点」よりも「実現している現在の時点」を強調したいからであろう。つまり、ドイツ語の「継続状態」の表現は、Adelung の見方を援用するならば、「積み重ねられた過去」が「いまここに存在している」ということに力点が置かれているのである。その否定の表現、つまり「非—完了状態がいまここに存在している」という表現は、成立しがたいので



はないだろうか。前置詞 seit を含む文の時制については、時代、地域、社会的階層などによる言語的差異を踏まえたうえで、より多くの用例を通じて考察しなければならない。今後の課題としたい。

## 注

- 1) Müller-Jabusch, Maximilian: Die Abenteuer des Prinzen Genji (Genji Monogatari) . Ein altjapanischer Roman der Murasaki Schikibu, Nach dem englischen Text des Kenchio Suyematsu ins Deutsche übertragen und mit einer Einleitung versehen von Maximilian Müller-Jabusch. München (Albert Langen) . 1911. Müller-Jabusch 訳はドイツ語の表現に関して識者の評価は芳しくない。
- 2) Donat, Walter: Das junge Veilchen aus den „Geschichte von Prinzen Genji“. Berlin und Buxtehude (Hermann Hübener) . 1947.
- 3) Die Geschichte vom Prinzen Genji. Wie sie geschrieben wurde um das Jahr eintausend unserer Zeitrechnung von Murasaki, Genannt Shikibu, Hofdame der Kaiserin von Japan. Nach der englischen Übertragung von Arthur Waley. Deutsch von Herberth E. Herlitschka. Erster Band. Berlin (Insel) . 2014. 初版は 1954 年。
- 4) 平川祐弘 アーサー・ウエイリー『源氏物語』の翻訳者 白水社 2008. p.116 以下「『ウエイリー源氏』の衝撃」の章参照。
- 5) Genji-Monogatari. Die Geschichte vom Prinzen Genji. Altjapanischer Liebesroman aus dem 11. Jahrhundert, verfaßt von der Hofdame Murasaki. Vollständige Ausgabe aus dem Original übersetzt von Oscar Benl. Band1. Zürich (Manses Verlag) . 1966.
- 6) ハイデルベルク大学日本学研究所の Judit Árokay によると、「Benl 訳は、職名や宮殿のいろいろな建物や宮廷の儀式は大部分日本語のまま残してあるが、脚注をつけてそれを詳しく説明している。この点では Waley の英語を基にした Herlitschka 訳は、ドイツ人の読者にとって Benl 訳よりは読みやすいのではないかと思う。Benl 訳を読むと、ドイツ人は日本語の単語で、ある程度奇異感を覚えることはあると思うが、原文に一番近くて、ドイツ語表現も優れている点では、『源氏物語』の神秘的な美、登場人物の複合的な精神が一番よく読み取れると思う。(中略) 悲劇的なことに、ドイツにおける『源氏物語』受容は現在までも原文を基にした完訳ではなく、1937年に

初めて出版された重訳に圧倒されている。Benl 訳はドイツ語の小説としても優れた作品と言えるが、出版社の無関心か、経済的な考慮か、出版部数の不足のために、残念なことに広く流布していない」という。上記の引用は、アロカイ、ユディット ドイツ語圏における『源氏物語』受容と翻訳の問題（世界の中の『源氏物語』——その普遍性と現代性——所収）臨川書店 2010. p.132 及び p.135。引用にあたって、本論考のコンテキストに沿って、一部表現を改めた。

- 7) Waley, Arhtur: A Tale of Genji. A Novel in Six Parts. By Lady Murasaki. Boston and New York (Houghton Mifflin) . 1925. 引用は以下のサイトの PDF を使用した。Web サイト：<http://www.unz.org/Pub/WaleyArthur-1926/>（閲覧日：2016.12.3）。なお、「桐壺」訳の初版は 1921 年。（これ以降、すべての引用文献（ドイツ語を含む）のページ数の前には記号 "p." を付ける。）
- 8) アーサー・ウェイリー 佐復秀樹訳：ウェイリー版源氏物語 1 平凡社 2008. p.15 以下。
- 9) 源氏物語 (1) 新日本古典文学大系 (19) 岩波書店 1993.
- 10) 谷崎潤一郎訳 源氏物語 卷一 中央公論社 1991. 19 頁以下。
- 11) Adelung, Johann-Christoph: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. Wien. 1811.
- 12) Campe, Joachim Heinrich: Wörterbuch der deutschen Sprache. Braunschweig. 1810.
- 13) Heinsius: Volksthümliches Wörterbuch der deutschen Sprache. Hannover. 1822/40.
- 14) Wenig, Christian: Gedrängtes Handwörterbuch der deutschen Sprache. Reutlingen. 1835.
- 15) Heyse, Johann Christian August: Handwörterbuch der deutschen Sprache. Magdeburg. 1849.
- 16) Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. 16 Bde. in 32 Teilbänden. Leipzig 1854-1961. Quellenverzeichnis Leipzig 1971. Online-Version vom 03.12.2016. Web サイト：<http://woerterbuchnetz.de/DWB/>（閲覧日：2016.12.3）。
- 17) Sanders, Daniel: Wörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig. 1876.
- 18) Wenig, Christian: Handwörterbuch der deutschen Sprache. 7., verb. u. verm. Auflage. Köln. 1885.
- 19) Heyne, Moriz: Deutsches Wörterbuch. Leipzig 1895.

- 20) Trübners deutsches Wörterbuch. 8 Bände. Hrsg. von Alfred Götze. Ab Bd. 5: Begr. von Alfred Götze. Hrsg. von Walther Mitzka. Berlin. 1955.
- 21) Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 21. unveränderte Auflage. Berlin u. New York. 1975.
- 22) Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes. 10., überarbeitete und erweiterte Auflage von Helmut Henne, Heidrun Kämper und Georg Objartel. Tübingen. 2002.
- 23) 杉田芳樹 カフカの『変身』における前置詞 seit について (『リユンコイス』第 49 号所収) 2016. 参照。